



東日本大震災から9年半後の高齢者の主観的幸福感と その関連要因の検討：相馬市沿岸部での横断研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-10-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木下, ゆり メールアドレス: 所属:
URL	https://fmu.repo.nii.ac.jp/records/2000408

論文内容要旨

しめい 氏名	きのした 木 下 ゆ り
学位論文題名	東日本大震災から 9 年半後の高齢者の主観的幸福感とその関連要因の検討：相馬市沿岸部での横断研究

【目的】 2011 年の東日本大震災(Great East Japan Earthquake : GEJE)で甚大な津波被害を受けた福島県相馬市は、コミュニティの再生維持と孤独死などの防止のため「災害市営住宅団地(以下、団地)」を整備した。本研究の目的は、GEJE から 9 年半後の相馬市沿岸部の高齢者の主観的幸福感とその関連要因について団地と団地以外の群に分けて検討することである。

【方法】 対象は相馬市沿岸部の「復興整備計画地域」に指定された 7 大字(人口 8103 人, 114 小字)の 65~84 歳の男女である。団地がある 9 小字と団地以外の 22 小字(1/4 クラスター抽出法)から 1,297 名を抽出した。2020 年 10 月~11 月, 無記名自記式の質問紙調査を留め置き法により行った。目的変数は PGC モラル総得点(17 点)とし, すべての項目との関連を検討した(単変量解析)。その結果有意に関連した項目から, 先行研究を参考に, 持家/非持家, 高次生活機能(老研式活動能力指標), 主観的健康感, 睡眠, 経済的ゆとり, 食品摂取多様性得点, 咀嚼状況, 共食機会, ソーシャルネットワーク(LSN-6), 孤独死を身近に感じる, 震災で経験したこと(家族の健康状態の悪化, 家族以外の人々の死, 対人関係の悪化)の 13 項目の説明変数, 性別, 年齢, 教育歴を調整変数として重回帰分析をおこなった。2 群(団地群: 主に津波で家を失い移住した住民, 非団地群: 主に震災前と同じ場所で生活している住民)に分けて分析した。

【結果】 回答者は 1,133 名(回収率 87.4%)で, 不完全な回答の 55 名を除外し, 1,078 名を分析対象とした(有効回答率 83.1%)。主観的幸福感(団地群 8.0 ± 4.6 , 非団地群 9.4 ± 4.3 だった。重回帰分析の結果, 両群共通で主観的幸福感の低さに有意に関連していた要因は, 「健康状態が悪い」(団地群 $\beta = -0.222$, 非団地群 $\beta = -0.263$), 「睡眠で休養がとれていない」(団地群 $\beta = -0.185$, 非団地群 $\beta = -0.229$), 「経済的に苦しい」(団地群 $\beta = -0.341$, 非団地群 $\beta = -0.207$), 「噛めない食べ物がある」(団地群 $\beta = -0.117$, 非団地群 $\beta = -0.112$), 「孤独死を身近に感じる」(団地群 $\beta = -0.171$, 非団地群 $\beta = -0.075$) だった。団地群のみで「(震災経験)家族以外の人々の死」($\beta = -0.125$)だった。非団地群でのみで「女性」($\beta = -0.099$), 「教育歴が中学卒業まで」($\beta = -0.062$), 「ソーシャルネットワークが小さい」($\beta = -0.113$), 「(震災経験)家族の健康状態の悪化」($\beta = -0.076$)だった。

【結論】 2011 年 3 月の地震, 津波, 東京電力福島第一原子力発電所事故から 9 年半後の福島県相馬市沿岸部では, 高齢者の主観的幸福感(主観的幸福感)は比較的低いことが明らかになった。関連要因は団地群と非団地群で, 共通点と相違点がみられた。共通の対策としては, 被災者への身体的・精神的保健支援は家族も含めて長期にわたり継続的に行うこと, 福祉支援, かかりつけ医制度の充実とヘルパーの積極的な利用, 地域での声掛け, 口腔保健指導・食支援が重要である。また, 団地群では心的外傷後ストレス障害(PTSD)に対する専門的支援の継続, 非団地群では地域づくりの強化が重要であることが示唆された。

学位論文審査結果報告書

令和4年8月1日

大学院医学研究科長 様

下記のとおり学位論文の審査を終了したので報告いたします。

記

学位申請者氏名 木下 ゆり

学位論文題名 東日本大震災から9年半後の高齢者の主観的幸福感とその関連要因の検討：相馬市沿岸部での横断研究

審査結果要旨

本研究は、原子力災害後、長期における高齢者の主観的幸福感を調べている。具体的には相馬市における団地群と非団地群において、それぞれの主観的幸福感を調べ、その関連要因を検討している。回答率の高いアンケート調査を行い、災害後長期の影響を明らかにしている点において非常に重要な知見を与えるものであると考える。

申請者とは、数回にわたり目的と研究デザインの整合性、結果から結論への論理展開に関してコメントのやりとりを行ったが、主査・副査からのコメントに適切に対応し、論文の修正を行った。社会に貢献し得る重要なテーマであり、国際的にも有益な知見と考える。以上より、本論文は学位論文として相応しいものであると報告する。

論文審査委員	主査	坪倉	正治
	副査	三浦	至
	副査	菅家	智史